

日本心理学会第75回大会 2011年9月16日(金)
 WS065 隠す心理を科学する (1) 一欺瞞的コミュニケーションの観点から

弁解としての嘘の社会的機能

菊地 史倫
 (公財) 鉄道総合技術研究所
 ※本研究は、東北大学大学院文学研究科所属当時のものである

発表概要

- 背景と目的
- 研究
 - 研究1：嘘の聞き手からの検討
 - 研究2：嘘の話し手からの検討
- 総合的考察
- 今後の検討課題

WS065 隠す心理を科学する (1) 一欺瞞的コミュニケーションの観点から 1 / 45

発表概要

- 背景と目的
- 研究
 - 研究1：嘘の聞き手からの検討
 - 研究2：嘘の話し手からの検討
- 総合的考察
- 今後の検討課題

WS065 隠す心理を科学する (1) 一欺瞞的コミュニケーションの観点から 2 / 45

嘘の一般的な印象

ネガティブな印象 (Backbier et al., 1996)



道徳・社会規範からの逸脱行為 (Bok, 1978)



“嘘つきは泥棒の始まり”

搾取的な嘘 (e.g. 詐欺)

WS065 隠す心理を科学する (1) 一欺瞞的コミュニケーションの観点から 3 / 45

嘘使用の日常性

「嘘をついてはいけない」



一日に1回以上、人は「嘘」をつく
 (DePaulo et al, 1996; 村井, 2000)



「嘘」の有用性や必要性
 日常的な「嘘」とは?



WS065 隠す心理を科学する (1) 一欺瞞的コミュニケーションの観点から 4 / 45

なぜ嘘をつくのか?

嘘 = コミュニケーション方略の一つ
 (Buller & Burgoon, 1994; Miller & Stiff, 1993)



嘘 (をつく) < 目的達成

“嘘も方便”

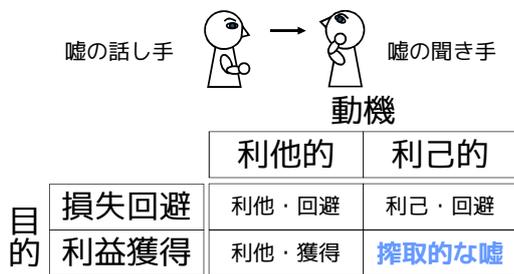
嘘の動機
 利己 > 利他

1. 損失 (不利益) 回避
 2. (新) 利益の獲得

(DePaulo, et al., 1996; Vrij, 2008)

WS065 隠す心理を科学する (1) 一欺瞞的コミュニケーションの観点から 5 / 45

嘘をつくときの動機と目的



日常的な嘘の使用状況

他者との葛藤が予測される状況 (Vrij, 2008)



必要以上の葛藤回避を目指した
損失回避の嘘が使用されやすい

日常的な嘘の特性



- 社会的潤滑油としての嘘
 - 弁解としての嘘
- 恋人の料理がおいしくないとき 寝坊して遅刻したとき



発言内容の欺瞞性に関する研究

◆村井 (1998) の研究



曖昧度・生起頻度・立証可能性
⇒ 欺瞞性の認知に影響

◆Kikuchi, Sato, & Nihei (2005)の研究

欺瞞性認知に生起確率が最も強い影響

※生起頻度・生起確率ともに“事象の起こりやすさ”を示すものだが、前者はGriceの質の公準の下位公準であることを想定している。

生起確率と目的達成の関係

生起確率低 ⇒ 欺瞞性高 (kikuchi et al., 2005; 村井, 1998)

生起確率と目的達成 (不利益回避) の関係は?

◆菊地・佐藤・阿部・仁平(2008)の研究

生起確率の異なる嘘の欺瞞性/信憑性と不利益回避について検討



生起確率低の嘘 ⇒ 不利益回避 (ゆるしてもらえる)

生起確率と目的達成の関係

生起確率低の嘘だとゆるしてもらえるのはなぜ?

生起確率は様々な認知と関連あり

生起確率と重大性の認知には負の関係 (Lichtenstein et al., 1978)

生起確率と責任性の認知には負の関係 (Fincham & Jaspers, 1991)



感情調整方略としての嘘

生起確率低の嘘だとゆるしてもらえるのはなぜ？

生起確率低の嘘⇒怒りを抑制 (菊地他, 2008)



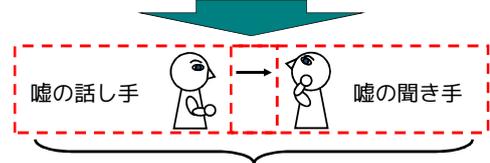
怒りとゆるしに強い負の相関 (菊地他, 2008)

責任性の認知⇒感情調整⇒不利益回避？

Weiner (2006)の認知・感情・行動モデル

嘘をつくときの前提

嘘をつくには「相手」が必要



欺瞞的コミュニケーション

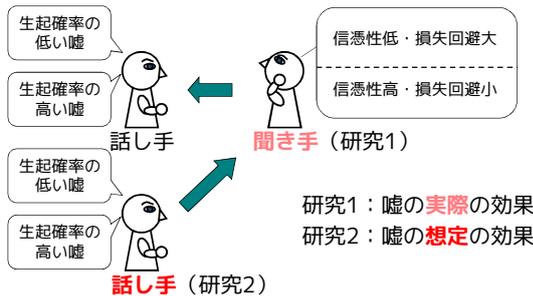
(deceptive communication; Miller & Stiff, 1993)

嘘に関わる立場の違いを考慮する必要性

菊地他 (2008) は嘘の聞き手の立場からの検討

本研究の目的

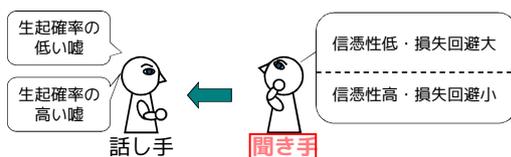
嘘に関わる立場を区別し、生起頻度が異なる弁解としての嘘の欺瞞性/信憑性と不利益回避の関係を検討。



発表概要

- 背景と目的
- 研究
 - 研究 1 : 嘘の聞き手からの検討
 - 研究 2 : 嘘の話し手からの検討
- 総合的考察
- 今後の検討課題

研究1：嘘の聞き手の立場



嘘の**実際**の効果の検討

方法

- シナリオ法を用いた質問紙実験
 - 遅刻場面を用いたシナリオ
- 参加者
 - 大学生144人 (男性84人・女性60人)。
 - 平均年齢18.55歳 (SD = 1.31)。
- 独立変数
 - 嘘の生起確率 (低・高; 参加者間要因)

生起確率低の嘘：バス事故に巻き込まれて遅れた
生起確率高の嘘：バス渋滞に巻き込まれて遅れた

本研究のシナリオ



- 大学のレポート課題の打ち合わせのため待ち合わせをする。
- 約束の時間に知人Aが来ないが、連絡先を交換しなかったため連絡つかず。
- 結局、Aは30分遅刻してくる。
- Aが遅刻理由を伝える。

生起確率低：バス事故
生起確率高：バス渋滞

従属変数

- 遅刻理由の生起確率
⇒操作チェック項目
- 遅刻理由の信憑性
- 遅刻理由の責任
- 遅刻に対する怒り感情
- 遅刻に対するゆるし
- 怒り表出行動
全て6件法 (0~5)

結果：嘘の聞き手_生起確率

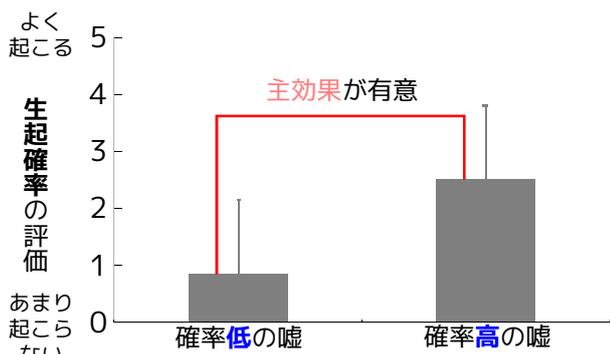


図1 遅刻理由別の生起頻度の評価 20 / 45

結果：嘘の聞き手_信憑性

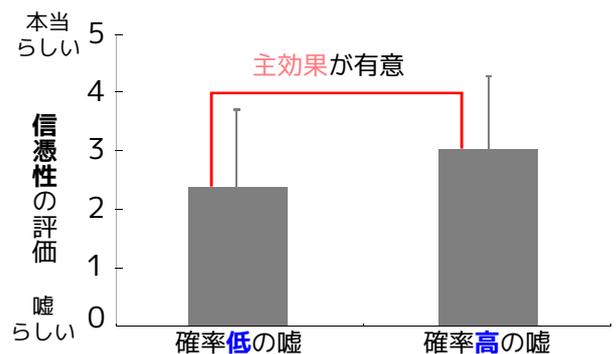


図2 遅刻理由別の信憑性の評価 21 / 45

結果：嘘の聞き手_責任

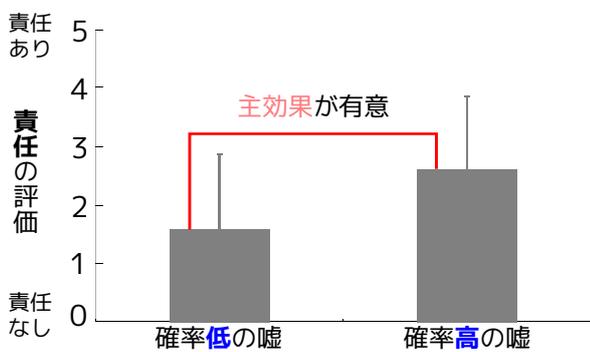


図3 遅刻理由別の責任の評価 22 / 45

結果：嘘の聞き手_怒り

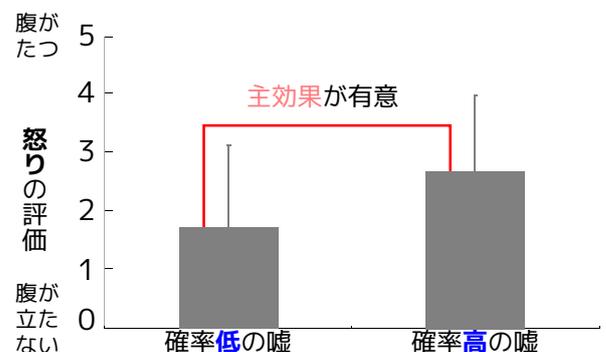
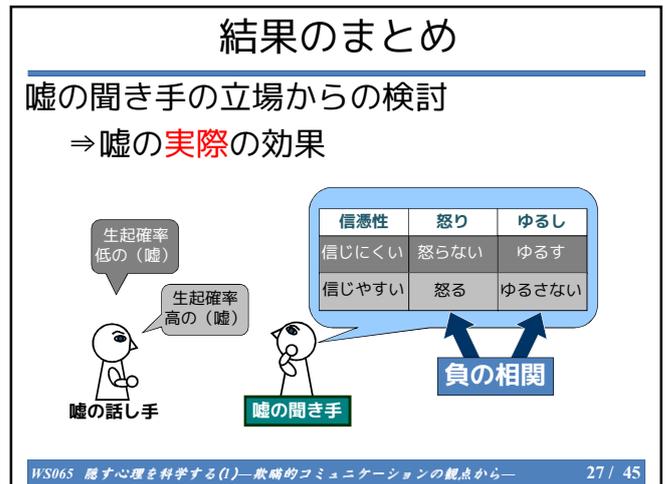
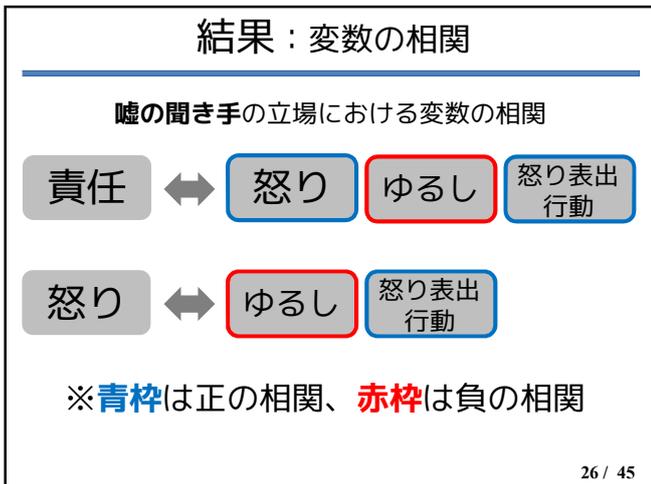
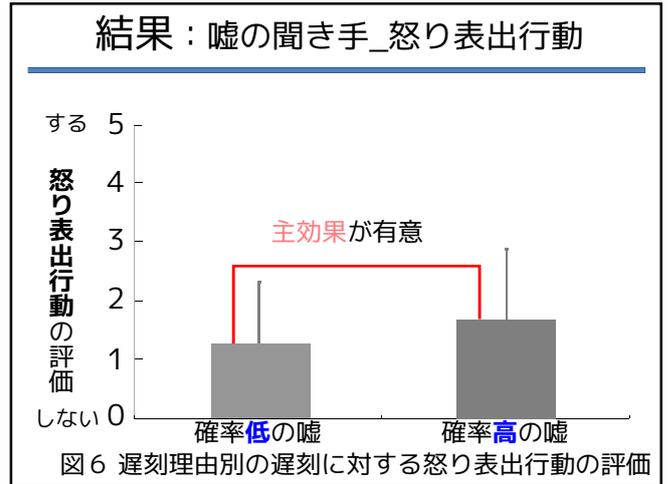
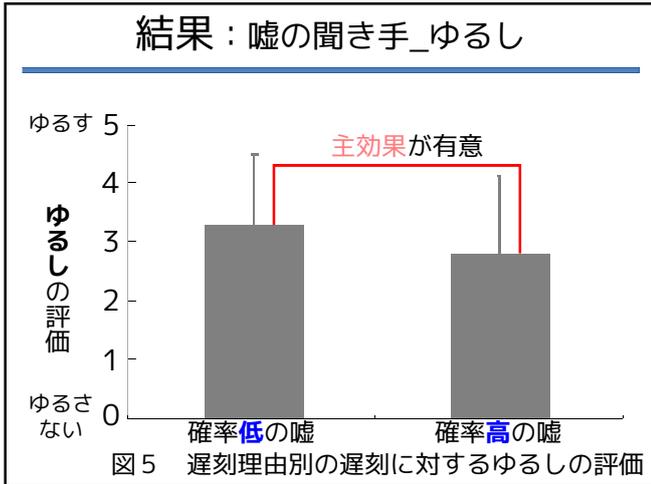


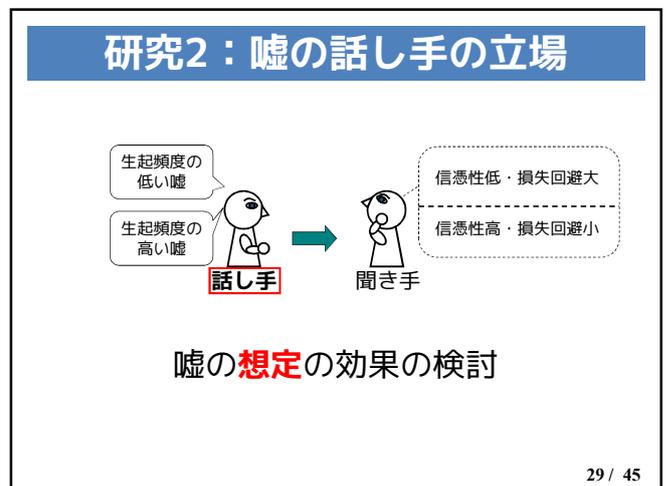
図4 遅刻理由別の遅刻に対する怒りの評価



発表概要

- 背景と目的
- 研究
 - 研究1：嘘の聞き手からの検討
 - 研究2：嘘の話し手からの検討
- 総合的考察
- 今後の検討課題

WS065 隠す心理を科学する(1)ー欺瞞的コミュニケーションの観点からー 28 / 45



方法

- シナリオ法を用いた質問紙実験
- 参加者
 - 大学生150人（男性60人・女性90人）。
 - 平均年齢18.47歳（ $SD = 0.59$ ）。
- 独立変数
 - 嘘の生起確率（低・高；参加者間要因）
- 従属変数
 - 発言の生起確率・信憑性・責任の程度・怒り
 - ゆるし・怒り表出行動

30 / 45

本研究のシナリオ

参加者



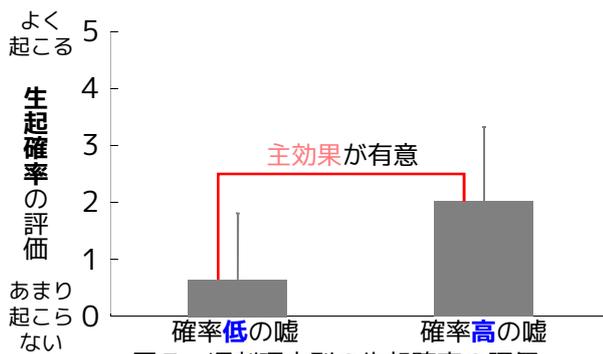
知人



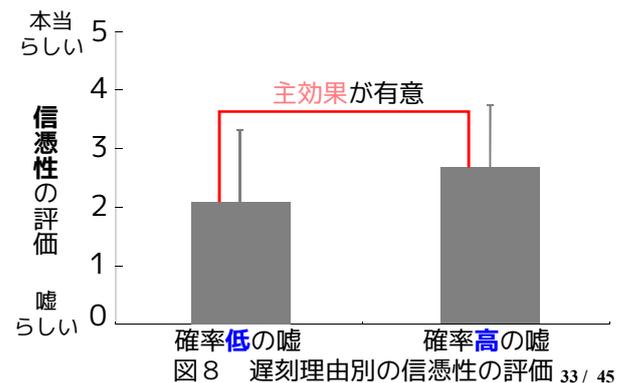
- ・大学のレポート課題の打ち合わせのため待ち合わせをする。
- ・**寝坊したため**約束の時間に間に合わず、連絡先交換していないので連絡できません。
- ・結局、30分遅刻してしまう。
- ・参加者が嘘の遅刻理由を伝える。

31 / 45

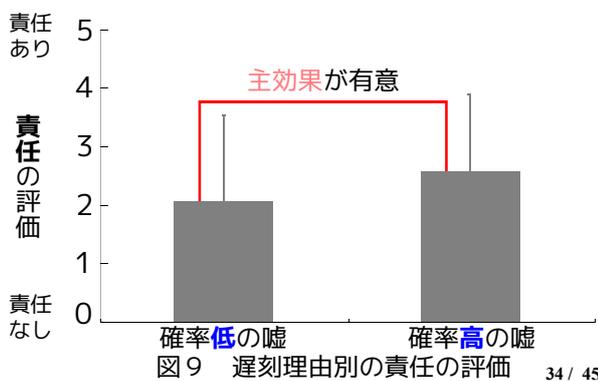
結果：嘘の話し手_生起確率



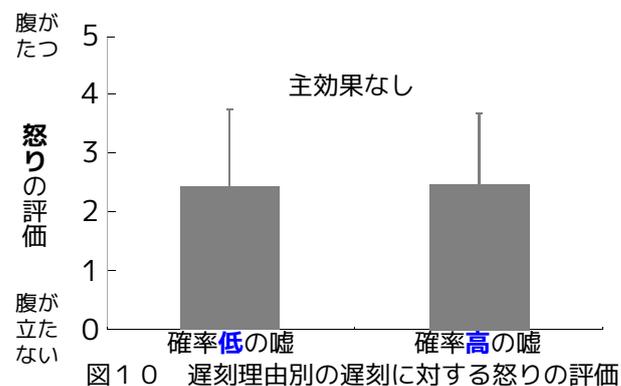
結果：嘘の話し手_信憑性

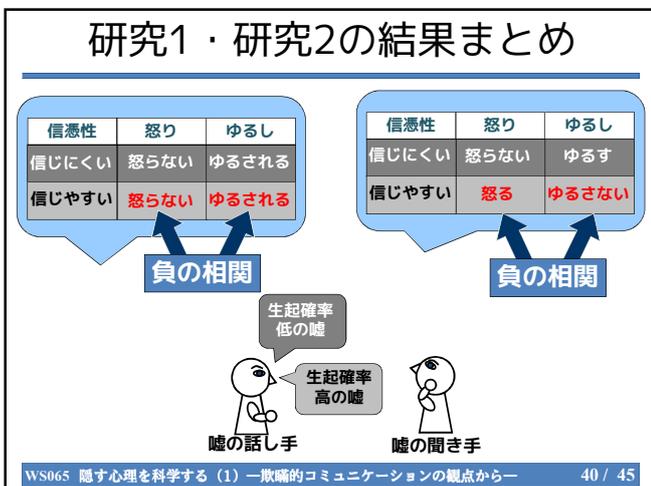
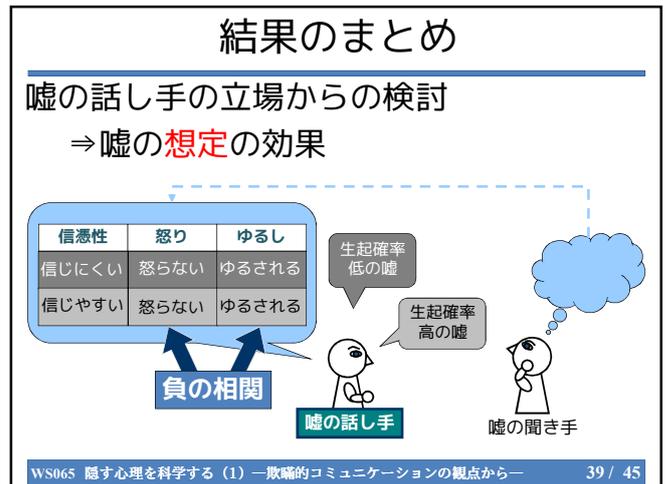
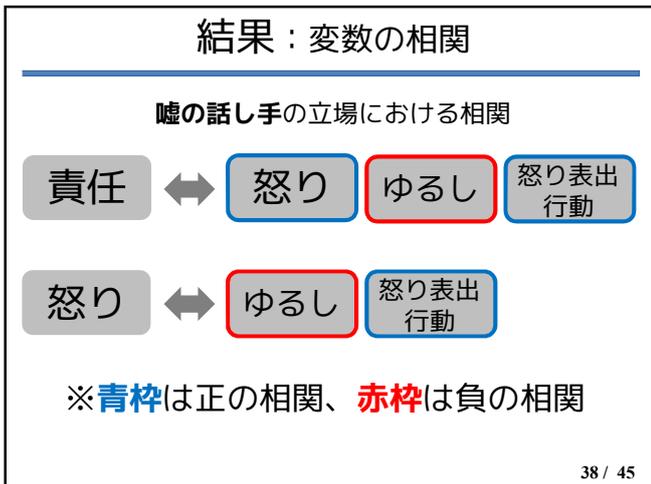
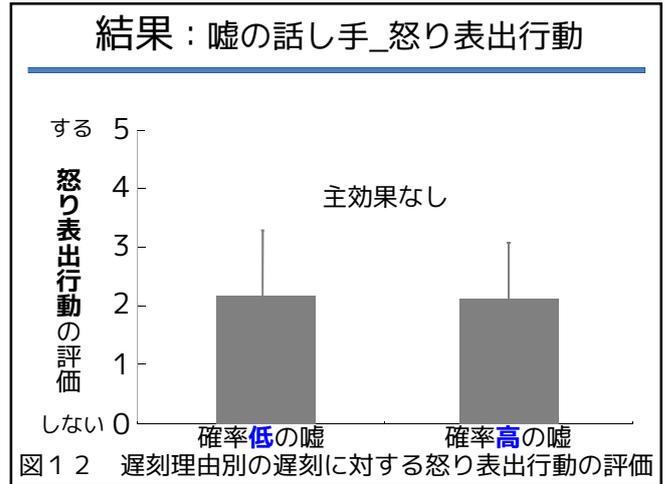
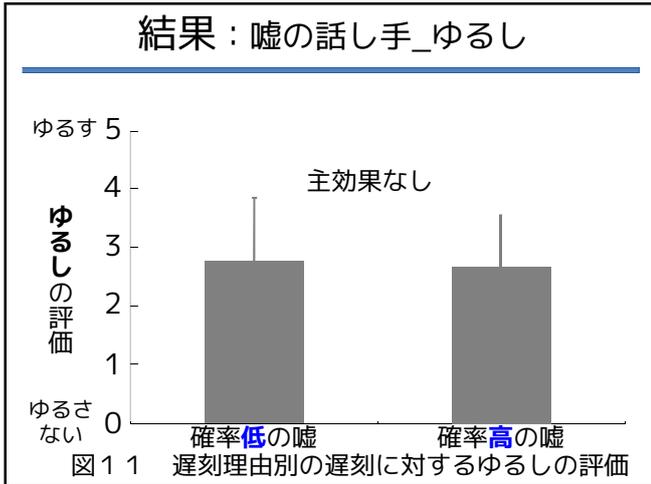


結果：嘘の話し手_責任



結果：嘘の話し手_怒り





- ### 発表概要
- 背景と目的
 - 研究
 - 研究1：嘘の聞き手からの検討
 - 研究2：嘘の話し手からの検討
 - 総合的考察
 - 今後の検討課題
- WS065 隠す心理を科学する (1) 一欺瞞的コミュニケーションの観点から 41 / 45

総合的考察

- 嘘に関わる立場に関わらず生起頻度と信憑性には正の関係。
⇒信じてもらうためには生起頻度が高い嘘が有効。
- 嘘の聞き手において生起頻度と不利益回避には負の関係。
⇒目的達成には生起頻度が低い嘘が有効。
生起頻度→責任性の認知→感情→不利益回避？
生起頻度低い嘘は信憑性が低いので、嘘の露見するリスクは高い→聞き手の探索行動増加（菊地他，2009）

WS065 隠す心理を科学する (1) 一欺瞞的コミュニケーションの観点から 42 / 45

総合的考察

- 嘘の話し手は生起頻度に関わらず不利益回避できると想定。
自己利益的バイアス？
設定状況の影響？（参照：菊地他，2009）
- 弁解としての嘘の社会的機能
必要以上の葛藤を回避し、調和を維持する機能。
本来的には真実を伝えて謝罪するのが望ましい…。
相手との関係性や状況を考えながら使用している？
嘘をつく人：好き vs. 真実を話す人：尊敬
(Pontari & Shelenker, 2006)

WS065 隠す心理を科学する (1) 一欺瞞的コミュニケーションの観点から 43 / 45

発表概要

- 背景と目的
- 研究
研究1：嘘の聞き手からの検討
研究2：嘘の話し手からの検討
- 総合的考察
- 今後の検討課題

WS065 隠す心理を科学する (1) 一欺瞞的コミュニケーションの観点から 44 / 45

今後の検討課題

- 本研究は嘘が「露見」していない状態
⇒嘘が露見したときに社会的機能はどうなるのか？
機能しない：弁解としての嘘（菊地・佐藤，2010；菊地他，2010）
機能する：欺瞞的ユーモア（Kikuchi et al., 2011）
未検討：社会的潤滑油としての嘘
- 本研究はワンセッションのコミュニケーション
⇒通常コミュニケーションは累積的。
長期的なコミュニケーションにおける効果は？
※本発表は博士論文を構成する研究の一部を再構成したものです。
共同研究者の佐藤拓氏、指導教官の阿部恒之教授に深く感謝いたします。

WS065 隠す心理を科学する (1) 一欺瞞的コミュニケーションの観点から 45 / 45

引用文献1

- Backbier, E., Hoogstaten, J., & Terwogt-Kouwenhoven, K. M. (1997). Situational determinants of the acceptability of telling lies. *Journal of Applied Social Psychology*, 27, 1048-1062.
- Bok, S. (1978). *Lying: Moral choice in public and private life*. New York: Pantheon Books. (ボク, S. 吉田勝 (訳) (1982). 嘘の人間学 TBSブリタニカ)
- Buller, D. B., & Burgoon, J. K. (1994). Deception: Strategic and nonstrategic communication. In J. A. Daly & J. M. Wiemann (Eds.), *Strategic interpersonal communication*. Hillsdale, NJ: Erlbaum, pp.191-223.
- DePaulo, B. M., Kashy, D. A., Kirkendol, S. E., Wyer, M. M., & Epstein, J. A. (1996). Lying in everyday life. *Journal of Personality and Social Psychology*, 70, 979-995.
- Fincham, F. D., & Jaspers, J. M. (1983). A Subjective probability approach to responsibility attribution. *British Journal of Social Psychology*, 22, 145-162.
- Kikuchi, F., Sato, T., & Nihei, Y. (2006). What speech contents do people use to detect deceit? *Tohoku Psychologica Folia*, 65, 37-44.
- 菊地史倫・佐藤拓・阿部恒之・仁平義明 (2008). 過失に対する赦しの評価に怒り感情・信憑性・重大性の評価が及ぼす影響 感情心理学研究, 15, 97-105.
- 菊地史倫・佐藤拓・阿部恒之・仁平義明 (2009). 弁明としての嘘がコストと利益の評価に及ぼす影響 感情心理学研究, 16, 220-228.
- 菊地史倫・佐藤拓 (2010). 嘘つきの代償—嘘の露見が弁解の効能に与える影響—日本認知心理学会第8回大会発表論文集, 135.
- 菊地史倫・佐藤拓・阿部恒之 (2010). 嘘の誤算—嘘の露見が弁解の効能に与える影響—. 日本心理学会第74回大会発表論文集, 957.

引用文献2

- Kikuchi, F., Sato, T., Kawashima, M., & Abe, T. (2011). Is a humorous excuse better than lies? *Tohoku Psychologica Folia*, 69, 34-39.
- Lichtenstein, S., Slovic, P., Fischhoff, B., Layman, M., & Coombs, B. (1978). Judged frequency of lethal events. *Journal of Experimental Psychology: Human Learning and Memory*, 4, 551-578.
- Miller, G. R., & Stiff, J. B. (1993). *Deceptive communication*. Newbury Park: Sage.
- 村井潤一郎 (1998). 情報操作理論に基づく発言内容の欺瞞性の分析 心理学研究, 69, 401-407.
- 村井潤一郎 (2000). 青年の日常生活における欺瞞 性格心理学研究, 9, 56-57.
- Pontari, B. A., & Schlenker, B. R. (2006). Helping friends manage impressions: We like helpful liars but respect truth tellers. *Basic and Applied Social Psychology*, 28, 177-183.
- Saxe, L. (1991). Lying: Thoughts of an applied social psychologist. *American Psychologist*, 46, 409-415.
- Vrij, A. (2008). Lying: A selfish act and a social lubricant. *Detecting lies and deceit: Pitfalls and Opportunities (2nd ed.)*. Chichester: John Wiley and sons, pp.11-35.
- Weiner, B. (2006). Social motivation, justice, and moral emotion: An attributional approach. Hillsdale, NJ: Lawrence Erlbaum Associates.
- (ワイナー, B. I. 清水 敏彦・唐沢 かつお (監訳) (2007). 社会的動機付けの心理学 北大路書房)